

岩手県紫波町の散村成立に関わる土地条件

豊島 正幸・山本 勝利・北川 靖夫*

(東北農業試験場・*四国農業試験場)

Land Condition Associated with Dispersed Patterns of Houses
in Rural Settlement of Shiwa, Iwate Prefecture

Masayuki TOYOSHINA, Shori YAMAMOTO and Yasuo KITAGAWA*

(Tohoku National Agricultural Experiment Station・)
(*Shikoku National Agricultural Experiment Station)

1 はじめに

近年、家屋が散在する散村地域では、生産・生活の両面において非効率性や不便さなどのマイナス面が強調され、その打開策として、一部の地域では集村化の方向も検討されつつある。その際十分に考慮しなければならないことは、散村成立の必然性である。その解明を通して散村形態を多角的に評価し、それを農村計画に生かしていくことが重要であろう。本研究では、典型的な散村地帯である岩手県紫波町を取り上げ、家屋の立地条件を土地条件との関連で分析する。

本研究に当たり、紫波町役場農林課並びに同町教育委員会のご協力に対して深く感謝する。

2 方法及び資料

(1) 家屋分布状態の定量的把握

各農業集落ごとに、最短距離累積法⁵⁾によって家屋分布状態を把握した。この方法は縮尺1万分の1の地図上で、任意の家屋から出発して最も近い家屋を順次辿っていき、家屋間の距離を昇順に並べて得られる累積曲線の単回帰係数を集散度指数とするものである。

(2) 地形分類図及び土壌図による土地条件の把握

土地条件把握のために、土壌図として紫波町農用地土壌図¹⁾を用いた。また、1948年撮影の空中写真の実体視に基づいて、微地形に留意した地形分類図³⁾を作成した。

(3) 古地図による近世の家屋立地に関する分析

自然立地的性格がより強く、また、現在の集落形態の原型ができたと思われる近世にさかのぼって家屋の立地条件を検討するために、弘化3年(1846年)の古地図²⁾を用いた。これには当時の水路網、土地利用及び土地所有状況が記されている。

3 結果及び考察

(1) 家屋集散度指数による集落形態の分類

当地域における昭和53年(1978年)時点の家屋集散度(α)を農業集落ごとに算出した。これと地図上の家屋分布状態とを対照させて、 α 値による集落形態分類を行った(表1)。それを各農業集落について図示したのが図1であ

表1 家屋集散度指数による集落形態の分類

集落形態	家屋集散度指数(α)
集 村	50 未 満
混 在	50 ~ 70
疎 塊 村	70 ~ 90
散 村	90 以 上

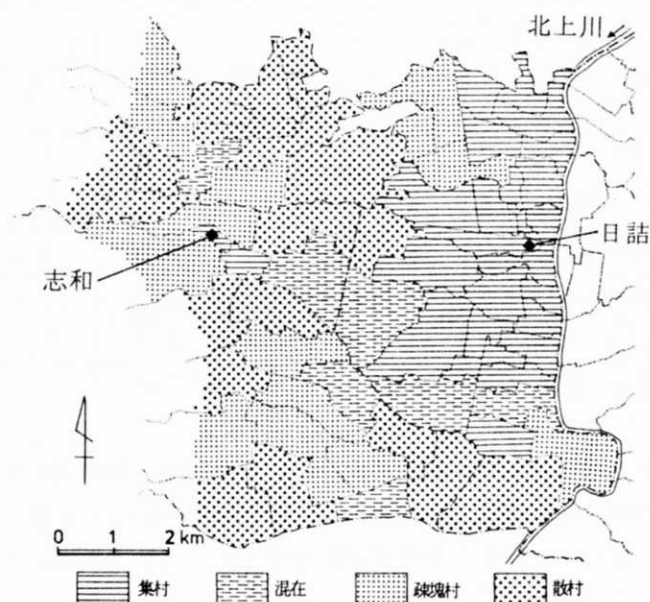


図1 各農業集落の集落形態

る。この中で、疎塊村とはいくつかの家屋が塊状をなして散在する状態である。混在型とは散村的及び集村的性格を合わせもった状態であり、このタイプは散村的状态の中に線状あるいは塊状の家屋群が新たに建設された場合などにみられる。

各集落形態の出現状況と地形分類図とを対照させると、集村は調査地域の東寄りの地帯、すなわち、北上川沿いの沖積低地や台地で顕著である。一方、散村及び疎塊村(以下、合わせて散村的集落と呼ぶ)はより西寄り(山寄り)の、扇状地地帯に出現する傾向が認められる。

(2) 散村的集落における土地条件と家屋立地場所

表2は、各農業集落に分布する土壌群のうち分布面積の大きい順に2種類(単一の土壌群のみが分布する場合は1

表2 集落形態別の主要土壌群

土壌群	黒 ボ ク 土	多 湿 黒 ボ ク 土	黒 ボ ク グ ラ イ 土	灰 色 台 地 土	グ ラ イ 台 地 土	黄 色 土	褐 色 低 地 土	灰 色 低 地 土	黒 泥 土
集落タイプ									
集 村[23]	0	48	30	9	4	43	9	17	9
混 在[7]	0	29	43	14	29	57	0	29	0
疎塊村[14]	0	71	43	14	29	21	7	7	0
散 村[19]	5	84	47	16	26	16	0	5	0

表中の数字は、各農業集落ごとに抽出された主要土壌群（分布面積上位2位）の集落タイプ別出現頻度（%）・〔 〕内は各集落タイプに属する農業集落数。

種類）抽出し、集落形態別に各土壌群の出現頻度（%）を求めたものである。これによれば、集村に比べて散村的集落は、多湿黒ボク土、黒ボクグライ土、灰色台地土及びグライ台地土の出現する頻度の高いことがわかる。これらの土壌は排水不良の、あるいは、地下水位の高い土地で生成されたものである。以上のことから、散村的集落は、扇状地でかつ湿性の土地条件を有する地帯に成立していることが指摘される。

図2は、散村的集落に分類された旧水分村宮手付近の微地形分類と古地図（1846年）に記されている屋敷地を示したものである。これによれば、屋敷地はいずれも微高地に

あり、しかも、その半数強は微高地の縁辺に位置することが注目される。これは、湿性の土地条件の下で比較的乾性な地点を居住地として選択してきた結果と考えられる。

また、同地区における屋敷地の配置を水路網と関連させて古地図を判読した結果、個々の屋敷地は水路を挟んで2つが対峙することはあっても、流下方向に複数の屋敷地が連なることは稀であり、水路に沿って互に100～200m隔てられた位置に配置されていることが判明した。このような屋敷地の配置は、当時、生活用水としての流水の水質浄化を図る点できわめて合理的であったと評価し得る。

4 ま と め

紫波町における散村的集落形態の原型成立は、少なくとも近世にさかのぼることが古地図によって確認された。当時の屋敷地に関する立地分析を通して散村成立要因を検討した結果、1)湿性の土地条件の下で居住適地は微高地（特に、その縁辺部）等の比較的乾性な所に限定されたこと、2)扇状地を自然流下する水の合理的利用を意図して、各屋敷地は水路に沿って互に離して配置されたこと、の2点が指摘された。これらの知見は、横手盆地における散村地帯にも共通する⁴⁾。

引 用 文 献

- 1) 加藤 好武, 小野 剛志, 豊島 正幸. 1991. 紫波町農用地土壌図. 岩手県発行.
- 2) 紫波町史編纂委員会編. 1988. 紫波町史三巻.
- 3) 豊島 正幸, 加藤 好武, 小野 剛志. 1990. 岩手県滝名川扇状地における下層土の性質と微地形との対応. ペドロジスト 34: 61-74.
- 4) 豊島 正幸, 山本 勝利, 北川 靖夫. 1991. 東北地方散村地帯の地形条件. 1991年農村計画学会発表要旨集. p.100-101.
- 5) 山本 勝利, 豊島 正幸, 北川 靖夫. 1991. 秋田県横手盆地における農業集落の集散度. 1991年度農村計画学会発表要旨集. p.102-103.

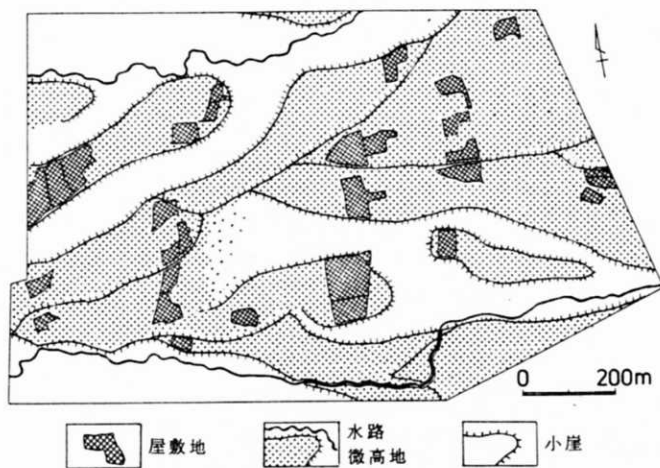


図2 宮手付近の微地形分類と弘化3年(1846年)当時の敷地の分布